

行方不明の将軍実朝の首—源実朝暗殺—

島口健次

建保七年一月二十七日

源実朝暗殺。建保七年（一二一九）一月二十七日、鶴岡八幡宮における右大臣拝賀の式で、将軍実朝が甥の鶴岡八幡宮別当公暁の手で暗殺された。実朝の首を持って逃走した公暁もまた追手に肘たれ、頼朝直系の子孫は断絶した。しかし、両者の首が行方不明であったことから、生存説や陰謀説など多くの謎が残り、真相はいまだ解明されていない。

建保七年（一二一九）一月二十七日夕刻事件は起こった。右大臣拝賀の礼の際、鎌倉鶴岡八幡宮で三代将軍源実朝が暗殺されたのである。五日前からの雪が、二尺も積もっていた中だった。

事件の実行犯は、実朝の甥の公暁。父である二代将軍頼家が、北条氏の手によって暗殺され、代わって将軍となった叔父実朝を恨んでの犯行であることは有名だ。しかし、この事件の裏に隠されている事情はそんな単純なものではない。鎌倉幕府のさまざまな人間模様が渦巻く中で起きた、「仕組まれた事件」だったのである。

仕組まれた暗殺

実行犯公暁の単独犯行説・北条義時説・三浦義村説など諸説紛々で、謎だらけの事件だ。しかし、当時の鎌倉幕府内部の権力構造を考えると、三浦義村が公暁を唆して、三代将軍実朝を暗殺したと考えるのが一番自然なようだ。

当時、北条氏は、二代将軍頼家とともにその乳母夫として台頭した比企能員を陰謀によって退け、政子の妹が乳母をした実朝を将軍の座につけた。自らを脅かした比企一族と同様の手段で、その権力基盤を守り抜こうとしていた。そればかりでなく、北条政子の妹の女（むすめ）を実朝の正妻として、頼朝・政子時代を再現しようとしていたのである。すべては北条氏の権力強化への方策だった。

一方、三浦一族は、頼朝の曾祖父の時代からの源家累代の家人として、鎌倉開幕後も自他ともに認める最有力御家人であった。さすがの北条氏も簡単に手が出せないばかりか、北条氏に勝るとも劣らない権謀術数に長けた一族でもあった。

建保元年（一二一三）の和田合戦では、一族の和田義盛を裏切って北条方に与した。以来、表向きには両者は親密に連携しているかに見えたが、当然、双方ともお互いを強く意識せざるを得ないことも確かであった。「隙を見せたほうが負け」という緊迫した状況だったのである。

次々に手を打ってくる北条氏を横目に、三浦一族の棟梁義村は何を考えたのであろう。北条氏の台頭をこのまま甘受すれば、自らの幕府内部での権力が弱体化し、北条氏の後塵を拝することになる。御家人のための組織として作られた幕府が、このまま北条氏のための組織となってしまうことへの危機感を感じていたかもしれない。

ではどうするか。正面きって戦ったとしたら、たとえ勝利を得たとしても相当の犠牲を覚悟しなければならない。戦いによって自らの力が弱まってしまったら、北条氏以外の第三勢力に付け入られるかもしれない。

さまざまな選択肢の中から、自ら乳母夫をつとめた頼家の遺児公暁を利用して、実朝を暗殺し、北条氏の権力の動揺を引き起こす。そして、公暁を将軍として自らはその後見役となり、北条氏に取って代わる。実朝を傀儡として利用した北条氏に対する御家人たちの不満も、自らが反北条の旗幟を鮮明にすることで、大きな力として利用できる。

用意周到な義村のことだから、こうした御家人らとは長い時間をかけて、連絡を取り合っていたかもしれない。たとえ、すべてが予定通りにいかなくとも、北条氏に自らの存在感を誇示することにはなる。

折しも、実朝右大臣拝賀の式が鶴岡八幡宮で行われる。公暁はその第四代別当。儀式の内容を知らないわけがない。また、三浦義村も幕閣の重鎮。当日の警備の状況も事前に知り得るし、その隙をつく作戦を練ることも可能だろう。日に日に大きくなる目の上の瘤・北条氏。当日の儀式では、その棟梁義時が、式の行列の最前列で御剣役をつとめる。実朝と義時を同時に抹殺する好機が到来しようとしていたのである。



右大臣拝賀式当日に暗殺された源実朝

右大臣拝賀式当日に暗殺された源実朝

公暁には、「お前の父頼家を暗殺したのは北条氏で、実朝を殺せば、亡き父の無念が晴らせるだけでなく、自分が後見人となってお前を将軍にしてやる」などと言っておけばよい。

準備は方端。あとは自ら手を下さずに、事が成就するのを待つだけ。三浦義村は自らが幕府を動かすことを想像していたにちがいない。しかし、予定は狂ってしまった。

北条義時が事前に危険を察知し、御剣役を辞退し、難を逃れたのである。実朝を殺し、ヲヤノ敵ハ、カクウツソ（『愚管抄』）と有頂天になっていた公暁とは、まったく違う思いが義村の胸をよぎったに違いない。公暁は事を成し遂げると、予定通りに迎えを送るよう

に三浦亭に使いを出す。この事件に三浦一族が一枚かんでいと推測させる動きである。

義村は、北条義時を討ち損じた後に何か起こるかを知っていた。しばしの熟考の後、家臣の長尾定景を公暁の討手として仕向けたのである。

将軍暗殺の実行犯を処罰すること。事件と三浦一族との関係を否定するだけでなく、北条一族との武力による正面衝突を避け、北条義時との間で政治決着することを選択したのである。義時も瞬時にして事の全貌を察知したにちがいない。義時は三浦一族に対して詮索するようなことはしなかった。

三代将軍実朝が暗殺され、その実行犯の公暁も討手に殺されたという事実だけが残り、真相は歴史の奥底深くに沈みこんでしまった。

三浦一族と北条氏とが武力で正面から衝突し、三浦一族が滅亡した「宝治合戦」は、この事件から二十九年後のことである。

仕組まれた「官打ち」の謎

暗殺された実朝は、十二歳で征夷大将軍となって以来、源氏の名誉のために官位の昇進を望んでいたという。

源氏の正統此時に縮まり畢んぬ、子孫敢て之を相継ぐ可らず、然らば飽くまで官職を帯し、家名を挙げんと欲す（『吾妻鏡』建保四年九月廿日条）

源氏は自分の代で終わるので、家名をあげるために、自分は官職を望んでいるのだという意味だが、なにやら自らの将来を予言しているかのような言葉だ。

いずれにしても、暗殺された時には右大臣まで昇りつめた。こうした官位の昇進に関しては、北条義時が大江広元を通じて実朝を諫めたといわれるが、何故、官位の昇進を義時は諫めたのだろうか。

官位の昇進に関しては、もちろん朝廷がその権限を持っている。当時の朝廷は、後鳥羽上皇の院政が行われていた。側近の反幕派公家土御門通親（みちちか）の影響から反幕思想を持ち、いつの日か幕府を倒し、自分自身が親政を行うことを願っていた人物である。

「承久記」などによると、後鳥羽上皇は、京三條白河の橋のあたりに、関東つまり幕府を呪阻する調伏の壇を建て、実朝の官位を過分に進ませることで、「官打ち」にしようとしていたというのである。この「官打ち」というのは何なのか。

当時の貴族社会は、家柄によって最終的な昇進の官位がほぼ決まっていた。これを飛び越えて“分不相応”に昇進すると、身に災いが生じ、ついにはその人を死に追いやるということが信じられていた。これが「官打ち」である。だから、先述したように、北条義時が実朝を諫めようとしたのである。

後鳥羽上皇は、実朝が昇官を望んでいることをいいことに、次々と官位を昇進させ、この「官打ち」を狙い、まんまとその目的を達成したのである。

当時は、今と違ってきわめて迷信深い時代なので、こうしたことが人々の気持ちの中で当然のこととして考えられていたのだろう。とすると、直接的ではないにしても、実朝暗殺は仕組まれた事件だったということになる。

一方でこの「官打ち」に関しては、単なる俗説であるという指摘もある。
その概略は次の通り。

『金槐和歌集』の、

山はさけ海はあせなん世なりとも
君にふたごころ我あらめやも
大君の勅をかしこみ父母に
心はわくとも人にいはめやも

という和歌は、その内容からも実朝の上皇に対する敬愛や忠誠の気持ちの現れであり、こうした実朝に上皇も好意を持っていたはずで、その存命中は「官打ち」を行うはずはなく、むしろ、暗殺後に倒幕の決意をするにいたったという説である。

実朝の首はどうなったか。暗殺された実朝は、翌二十八日戌刻（午後七時八時ごろ）、勝長寿院の傍らに埋葬された。

去夜御首の所在を知らず、五體不具なり、其憚（はばかり）有る可きに依りて、昨日公氏に給はる所の御鸞を以て御頭に用ひ、棺に入れ奉る。（「吾妻鏡」建保七年正月二十八日条）

公暁に討ち取られた実朝の首は懸命の搜索にもかかわらず、見つけ出すことはできず、死の直前に自ら切った髪を首の代わりとして葬儀は行われた。実朝の首はどこに行ったのだろうか。

実朝を討ち取った証として、公暁は確かに実朝の首を持っていたはずである。義村の討手と遭遇する直前に隠したか、立ち回りの最中に紛失してしまったのだろうか。

『愚管抄』には、

岡山（岡のような山）ノ雪ノ中ヨリ モトメ出タ

とあるので、葬儀までには発見することができなかったものの、ほどなく首は発見されたようだ。

発見された実朝の首は、非公式に埋葬されたようである。鎌倉幕府の半公的記録である『吾妻鏡』がそのことについて一言も触れていないからである。

現在、実朝の墓所と伝えられている所は何力所かある。それらを次に紹介しよう。

① 相模国大住郡波多野荘東田原村・大聖山金剛寺

『新編相模国風土記稿』によると、実朝暗殺の後、三浦郡武村の住人で三浦介を称する武常晴なる人物が、実朝の首を当地へ持ってきて、実朝が帰依していた僧行勇（ぎょうゆう）を導師として構内に埋葬し、金剛寺を草創したという。

この武常晴がいかなる人物かは不明である。しかし、「吾妻鏡」宝治元年（一二四七）六月二十二日条にある宝治合戦での討死および捕虜となった武士の名の中に、武左衛門尉ら一族の名がある。三浦一族に与して自刃、討死したとあるので、武常晴が三浦一族か、それに近い存在であったことは確かだ。

また、『吾妻鏡』文治四年（一一八八）八月二十三日条に、波多野荘をめぐって波多野義

景と三浦一族岡崎義実との争いの記録があるから、三浦氏と波多野荘は何か関係があったことは間違いない。したがって、三浦介を称する武常晴がこの地に現れたとしても不思議ではない。しかしどのような方法で常晴が実朝の首を手に入れたのか、なぜ波多野荘にそれを埋葬したのかなどは不明である。

現在実朝の御首塚といわれる五輪塔が残っている。現在の供養塔は石塔であるが、以前は木塔であった。その木塔は、鎌倉国宝館に収蔵されている。

②紀伊国海部郡由良荘・西方寺（のち興国寺）

『紀伊国続風土記』『鷲峰開山法燈圓明国師行実年譜』は、それぞれの伝承に多少の差異があるが、実朝近習の藤原景倫が、実朝の命をうけ渡宋しようとした時、その訃報を知り、菩提を弔うため高野山に登った。この時、実朝の葬儀に立ち合った入道西入が拾得したという実朝の頭骨を得て、西方寺に葬ったと伝えている。

景倫は出家して願性（生）を名乗るが、『鎌倉遺文』四九五六号・四九六〇号には、この願性が尼將軍政子から、実朝の菩提を弔うため、由良荘・地頭職が与えられたことが記されている。



波多野荘の金剛寺にある実朝の首塚

③高野山金剛三昧院

『雑談集』は、景倫の旧妻から聞いた話として、実朝の首の骨が金剛三昧院に葬られたことを伝えている。

実朝の首に焦点を絞ると以上の三ヶ所ということになるだろう。では、これらのうちのどこが本物かということを決めるのは至難の業。いずれにもそれらしい理由があるからだ。すべてに分骨されて埋葬されているかもしれない。あえていうなら、史料的には、由良荘西方寺、状況証拠からいえば、波多野荘金剛寺といったところだろうか。

これら以外に鎌倉の寿福寺にある北条政子の墓の隣りに実朝の墓があり、江戸小日向の恵日山金剛寺にも実朝の墓がある。

《参考文献》

奥富敬之著「源氏三代～死の謎を探る」（新人物往来社）

奥富敬之著『相模三浦一族』（同）